

学生から見た社会科学部

——学際性と国際性——*

SAGAS

青柳悠山、山本章央、チョン・ミンウ

1 はじめに

我々はSAGAS（Shagaku Authorized Gakusei Supporters）という国際交流サークルの成員である。社会科学部にはCJSP（Contemporary Japanese Studies Program）という英語で学位を取得するプログラムがあり、主に海外からきた留学生を対象に授業を行っている。一般学生もこの学科に属する一連の授業を履修することができるが、実際に履修している学生の割合は低い。我々は、主としてこのプログラムに属する留学生と一般学生の交流を促進するために、両者が交流できるような機会を提供する活動をしている。本論文は、社会科学部創設50周年を記念して開催された「社会学に未来はあるのか」という学生のプレゼンテーション大会で、我々が行った発表をもとに作成した。社会科学部の理念は、学際化、国際化、臨床化を三本柱としている。我々のプレゼンテーションでは、この3つのうち学際化と国際化に着目し、社会科学部に、これらの理念を学生が体现できる環境が整っているか、そして学生はそれらの理念を実際に体现しているかについて検証した。またその中で発見した問題点の根本的な原因を追求し、さらにそれらの改善策を考察した。以下に示すのは、その内容の全貌である。

2 社会科学部の理念：学際性と国際性

学際性と国際性は、その領域が学問か国か、という違いを除けば、類似した性質だと我々は考える。社会科学部の主たる特徴である学際性とは、複数の学問を理解したうえで、他の学問との調和を生み出す力のことだ。近年、社会という枠のとらえ方が広がり、世界がグローバル化する一方、社会問題も非常に複雑になってきた。そこで、1つの学問

* 本誌掲載に当たって、社会科学総合学術院笠島洋一准教授の指導の下に作成された。

の一面的な社会の見方を排し、複数の学問の多面的、複眼的な見方で、社会事象を立体的にとらえることで、問題の分析力を養うことが重要になる。さらに、近年の学問の行き過ぎた専門分化は、学問間の軋轢を生み出した。例えば、ある社会問題に対して、政治学が導き出した解決策と経済学が導き出したそれが反発するような事例である。また、それら諸学問の社会の見方は、しばしば人間の見方と乖離するものになった。そこで、1つの社会哲学から、複数の社会科学が派生したという西欧の歴史的経緯に立ち返り、社会哲学の創出により、これらの問題の解決が試みられるようになった。この単眼から複眼への移行、並びに、社会諸科学体系の再構築は、世界的にも主流になりつつあり、また日本では早稲田大学社会科学部が先進的にこれを実施し、学部設立以来受け継いできた理念だと認識している。学際性は国際性を類推して考えるとわかりやすい。国際性とは、異なる出自を持つ人々の、それらから生まれる様々な考え方を調整し、良好な関係の構築を可能にする性質のことである。異なる文化、宗教、価値観を持った人々が混在し、それらによって引き起こされる衝突が増えているのが昨今の社会の特徴である。そこで、その社会に冷静な分析を加え、世界の多様な考え方を調整し、平和的な関係を構築していく人が、これらの問題の解決に必要な不可欠である。複数の領域の異なる学問、または文化、宗教、価値観を異にする人々を理解し、違いを認識したうえで、それらをつなぎ合わせ、良好な関係の構築を図るという点で、学際性と国際性は似た性質である。

3 学際性と国際性の検証

次に、学際性と国際性の理念が十分に体现されているかを検証していく。両者は類似しているので、類似した尺度で検証することができる。我々はこの尺度を2段階に分けた。1つ目は、理念を体现できる環境が整っているか、2つ目はその理念を学生が体现しているか、である。すると、検証項目は学際性と国際性でそれぞれ2点ずつ、計4点に絞られる。

- ①大学は異なる学問の様々な分野を履修することができる環境を提供しているか（学際性）
- ②学部生はそれら諸学問の関係を構築する力を身に付けることができるか（学際性）
- ③大学は異なる宗教、文化、価値観を持った人々の、様々な考えに触れることができる環境を提供しているか（国際性）
- ④学部生はそれらの考えを調整し、平和的な関係を構築する力を身に付けることができるか（国際性）

学問の関係性を構築する前に、複数の学問分野を理解する環境が、必要不可欠なのは自明である。また、異なる人々と平和的な関係を構築する以前に、多様な学生が集まる環境が

整っていないければ話にならない。したがって、学際性における①は②の前提条件である。国際性についても同様に、③は④の前提条件である。ここで注意しておきたいのは、環境を整えるのは大学の役割で、理念を体現できるか否かは学生の自発性にゆだねられていると考えてはいけない、ということだ。教育機関としての大学は、学生よりも主体的に、学部生がこれらの理念を体得できるよう、教育しなければならない。したがって、検証項目の2段階目、すなわち②と④に関しては、学部理念に沿った大学教育がどの程度学生にほどこされているかを示す一つの結果と見る事が出来る。他方、学生はそれらの理念を習得するために努力しなければならないことは、言うまでもない。では検証を始める。

まず①について検証してみたい。社会科学部は上述した理念を達成するため、社会科学分野を中心に、自然科学、人文科学などの様々な分野の授業を履修することができる。したがって①すなわち、異なる学問の様々な分野を履修することができるか、については、一定程度この要件を満たしていると、我々は結論付ける。ただし、これは既存の学問の修正や、新しい学問の出現にあわせて、それらがきちんと学部生が受ける講義に反映されているかどうか、随時検証を要するものである。次に②すなわち、学部生はそれら諸学問の関係を構築する力を身に付けることができるか、を検討してみたい。学際性を、前述のとおり、諸学問を学びその関係性を構築すること、と捉えるならば、様々な分野の授業を自由に履修できることだけでは、学際性という理念を体現したことにならない。その関係性を構築する能力を養うことが最終目標である。社会科学部では、確かに、様々な分野の諸学問を学ぶことができるが、それら個々の学問がどのように関係しているかを学ぶ機会はほとんどない。例えば、社会科学部では「文学」と「政治」の授業がある。これら2つの関係を構築するのは完全に学生にゆだねられており、授業で直接その関係性を取り扱うことはない。したがって②は達成されていないと我々は結論付ける。単刀直入に、③すなわち、異なる文化、宗教、価値観を持った人々の、様々な考えに触れることができるか、については、社会科学部で十分達成されていないと考える。CJSP コースの設立によって、社会科学部は学内の国際化への一歩を踏み出した。しかし、数の面からいうと、日本人学生数約 3,000 人に対し、CJSP 生などの留学生約 150 人（2017 年 1 月時点、社会科学総合学術院事務所にて聞き取り）は明らかに均衡が取れていない。また、我々の経験上、社会科学部の国際化を推進する CJSP コースが、逆に学部内を留学生と一般学生とに分断しているように感じる。これは「実質的な国際化」（留学生の数だけでなく、一般学生と留学生がコミュニケーションの機会を継続的に持てる環境が整っている状況：詳細は第 5 節参照）という本質的な国際化がなされていないからだと考えている。上記により、論理的に④すなわち、学部生はそれらの考えを調整し、平和的な関係を構築する力を身に付けることができるか、も達成されていないことになる。以上の検証結果をまとめると、社会科学部は、学際性について、「異なる学問の様々な分野を履修すること」ができるが、「学部生

はそれら諸学問の関係を構築する力を身に付けること」ができず、そして、国際性については、「異なる宗教、文化、価値観を持った人々の、様々な考えに触れること」ができないので、「学部生はそれらの考えを調整し、平和的な関係を構築する力を習得」することもできない、となる。いずれの理念も十分に体现されていないということだ。

4 原因追求：学際性

「社会科学部って、何をやっているのかよくわからない」という声は学部内外でよく聞く。これは、学際性が社会科学部で十分に達成されていないことに対して向けられた一種の批判であると我々は考えている。このような批判が生まれる背景には、社会の変化とそれに伴う学部理念の解釈の変化があると考えている。以前、社会科学部の1期生の方にお会いしたことがある。その方は「我々の時代には各論だけでなく原論があった」とおっしゃった。原論とは、社会諸科学を基礎づける理論のことである。西欧では、1つの社会哲学から、複数の社会科学が派生したという歴史的な経緯がある。その社会哲学を扱うのが原論であった。我々はこれが、社会諸科学を包摂することで、個々の理論の調和を図ってきたのだと考えている。専門、分化するそれらの学問を緩やかに支配することで、異なる学問を専門とする人々に「共通の土台」を設定し、これが学問間の垣根を越えて、社会について議論する空間を作り出した。原論が各論を緩やかにまとめ、仮に専門を突き詰めたとしても、根っこの部分ではつながっていたのだと思われる。社会科学部を例にあげると、原論の授業は必修科目だったので、同じ学部生が異なる専門分野に舵を切ったとしても、原論という共通の土台があることにより、自分とは違う学問に身を投じる学生が何を学んでいるのかを、比較的鮮明に把握することができたのだと思う。また異なる学問から異なる結論が出てくるのは必至のことである。しかしそういった場合でも、この原論は、それぞれの専門分野を専門とする人々の間で合意点となり、議論する場を提供する役割を担ったと考える。今の我々の授業に社会科学の原論のようなものはない。それを担っていた「社会科学原論」という授業は2014年度をもって廃止となった。原論がなくなり、ほとんどの授業が各論に移行したことにより、従来の共通の土台が失われ、それぞれの学問が、他の諸学問とどのように関連しあっているのか、明らかでなくなった（図1参照）。「社会科学部って何やってるの？」と友人に問われ、返答に窮したことは、私だけでなく多くの他の学部生にも当てはまることではないだろうか。この背景には、社会の複雑化に伴う、学部理念の解釈の変化があると推測している。社会の複雑化は多様化と同時に進行する。多様化した学問を分析するために、学問も多様化する。すると、それらを緩やかに統合する原論のようなものが作れなくなる。また、社会は多様な価値を認めてきた。男性はかくあるべき、女性はかくあるべき、というような言表が昨今の時勢に適さなくなって

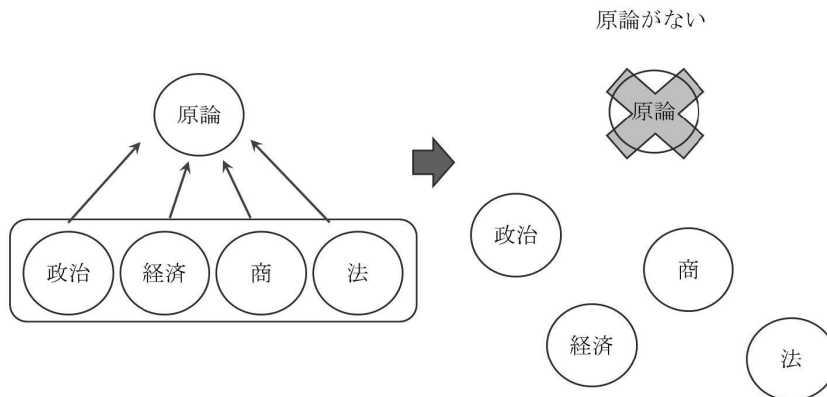


図1 原論の喪失（著者作成）

きたことから類推すれば、社会科学はかくあるべきというような原論が複雑化した社会に影響力を持たなくなってきたことは容易に解される。社会科学部は従来、社会科学の原論を創出するという具体的な目的達成のために、広大な学問範囲を対象に研究を行っていた。そしてこの目的達成に必要な資質として、学際性という言葉が適用された。しかし、時代の変化に伴いこれがかなわなくなった。大いなる使命を失った社会科学部は諸学問を統合する力を失い、それらの関係性は希薄になった。こうした学部理念上の変化はただちに学生に影響を及ぼす。学部生は社会科学部が何をしているのか、自分が何のために学んでいるのか、「よくわからなくなった」のである。社会科学部の授業は雑多な学問の集合体になったのである。

5 原因追求：国際性

社会科学部の国際性が達成されていないことの根本的な原因は、留学生と一般学生がコミュニケーションを取る機会の少なさにあると考える。「異なる文化、宗教、価値観を持った人々の、様々な考えに触れること」とは、おそらく「交流」という言葉に換言できると思う。そして、これは我々SAGASが日々取り組んでいることである。十分とはいえないまでも、日々学内の留学生、CJSP生と向き合っているという点で、ある程度深い洞察が得られていると考える。そこで、我々が普段留学生と接していて、感じたこと、考えたことをそのまま伝えることで、③（第3節参照）の批判の論拠の1つにしたいと思う。まず、我々が活動していくなかで、CJSP生からよく聞く意見を紹介したいと思う。

- 「CJSPの中でも同じ国籍の人でグループができており、そのグループを出ようとしない。きっかけがないのが問題。」(K君)

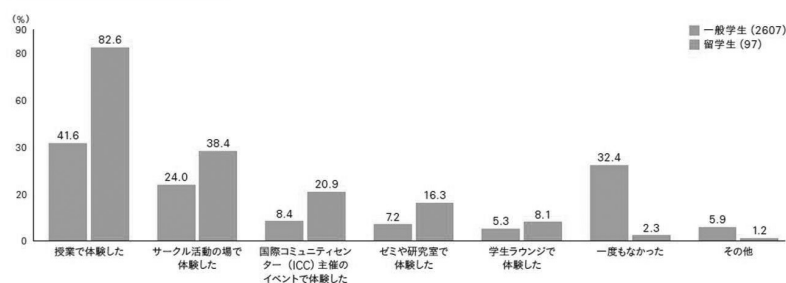
- 「授業やゼミでも一般の学生はあまり会えず、来るとしても積極的に私たちと絡まない。」(Sさん)
- 「同じ言語を喋れないのは大きい壁。これは一般学生が英語を喋れないということはもちろん、CJSP生も日本語が喋れるようになるのは高学年になってからでどうにもできない。」(L君)

国際交流に言語の壁はつきもので、それをどう乗り越えていくのかが問題だ。しかし、出会う機会がなければ、どうにもしようがない。恒常的に留学生と出会うことができれば、乗り越えるべき壁も、壁として認識されない。これに関しては、学部生の積極性だけでなく、社会科学部の制度から生じる、構造的問題があるだろう。CJSPコースの存在が逆に、学生を留学生と一般学生とで分断する傾向を生んでいるということだ。また、国際化を謳うのなら、留学生の日本語教育と同程度の英語教育が一般学生にもなされるべきではないだろうか。受験英語にスピーキングは含まれていない。これに対処するために社会科学部では英会話の授業を初年度に必修科目として履修させるカリキュラムを組んでいる。しかしながら、これは半期の授業である。そして、継続的にこの授業を履修するには、追加費用を払い続けなければならない仕組みとなっている。したがって、学部生にとってこの科目を取り続けることは困難である。

次に、実際どれぐらいの留学生が国際交流を行っているかを示す、有力な情報である早稲田大学学生部の『学生生活調査』を紹介する(表1参照)。調査は2015年度のものである。質問は「入学してからこれまでの間にキャンパスで、国籍や文化的背景を異にする学生とのコミュニケーションを体験する機会がありましたか?」である。これに対し、一般学生と留学生の回答を比較している。最初に注目すべきは「授業で体験した」と回答している一般学生の割合の低さである。また、一般学生の中で、一度もなかったと答えている人は32%にも上る。さらに、一般学生も留学生も、ともに「授業で体験した」という割合が最高で、それ以外の項目の割合は、これと比べると極端に低い。ここから推測できるのは、留学生と一般学生は授業で一言二言、あいさつ程度の会話はするものの、授業が終わるとすぐさま離散して、友好的な関係を築けていないのではないかと、ということだ。そもそも、授業の一環としてのコミュニケーションは、私たちが国際交流におけるコミュニケーションとして思い浮かべるものとかけ離れている。つまり、ディスカッションやディベートなどの授業で行われる形式的なコミュニケーションよりもむしろ、より日常的なものが、国際交流における異文化間のコミュニケーションとして適当である。しかしながら、授業で体験した「コミュニケーション」の実態は、留学生を交えたディスカッションのことを指すのではないかと。また、この統計においては、一般学生にとっては「国籍や文化的背景を異にする学生」は基本的に留学生である。しかし、留学生にとっては、一般学生も自分の出身国以外から留学している学生もこれに属する。つまり、CJSPなどの多国

表1 早稲田大学の国際化の状況

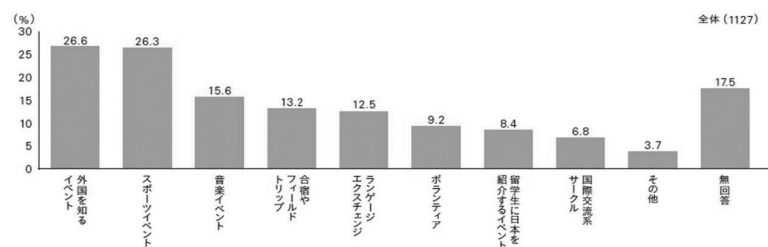
入学してからこれまでの間にキャンパスで、国籍や文化的背景を異にする学生とのコミュニケーションを体験する機会がありましたか？（主なものを2つまで選択）



（出所）早稲田大学学生部『学生生活調査』より引用（棒グラフ左側：一般学生、右側：留学生）

表2 早稲田大学の国際化の状況

「体験する機会がなかった」と回答した方にお尋ねします」どのような異文化交流の機会があったら参加したいと思いますか？（主なものを2つまで選択）



（出所）早稲田大学学生部『学生生活調査』より引用

籍の学生が集うプログラムでは、例えば、A国からの留学生とB国からの留学生がコミュニケーションをとったとしてもこれに数えられる。このことは注意しなければならない。

前述の調査に関連する、もう一つの統計データを紹介したい（表2参照）。表1の質問で体験する機会が「一度もなかった」と回答した人を対象に行った調査である。質問は「どのような異文化交流の機会があったら参加したいと思いますか？」である。無回答の割合が17.5%あるが、これを仮に交流に関心がないと受け取った場合、残りの82.5%の学生は、少なくとも異文化交流に関心があると解釈することができる。表1で体験したことが「一度もなかった」と答えたのはほとんどが一般学生だったことから、これに回答している学生の多くは彼らであることが推測される。であれば、彼らの交流に対する関心は高いと推測できる。以上のことから、特に一般学生の留学生との交流に対する関心は高いものの、その機会に恵まれていない、ということがわかる。また、一番割合が高かった項目

は「外国を知るイベント」であり、次に僅差で「スポーツイベント」が来ている。どちらも、言語をコミュニケーションの道具として用いないイベントと考えられる。

学内の留学生の数を増やすだけが、大学が行うべき国際化に関する施策ではない。実質的に一般学生と留学生がコミュニケーションをしていることが、本質的な国際化の重要な要素である。なぜなら「異なる出自を持つ人々の、それから生まれる様々な考え方」を理解し、「良好な関係」を構築するためには、コミュニケーションが必要不可欠であるからだ。したがって、留学生の数が増えても、大学内外で彼らと一般学生のコミュニケーションの機会が存在していなければ、早稲田大学が真に国際化しているとは言えない。つまり、留学生の数が国際化の度合いを充分保証する根拠とは成りえない。長期的な早稲田大学の改革計画を記した「Waseda Vision 150」は、2032年までに留学生は10,000人、海外派遣留学を全学生に施すと謳っている。計画通りならば、早稲田大学は急速な「国際化」を迎えるだろう。しかし、現状が打開されないままの数ばかりの国際化は学内をさらなる分断へといざないかねない。国際化を本気で推進するためには、実質的な国際化に目を向ける必要がある。

6 考察

社会科学部の学際性を充実させるために必要なのは異なる学問を互いに結びつける引力である。「4 原因追求：学際性」で述べたように、社会科学部に原論はなくなった。現在、学問は自由奔放に際限なく専門化し、それらの関係性が希薄になっている。社会科学部の学生は多様な学問を授業で学ぶことはできるが、その関係性の構築は完全に学生自身に任されている。自分の好きなことに時間を割ける大学の自由度の高さもあいまって、複数の学問の難解な理論を読み解くよりも、サークルや部活動などの課外活動に没頭し、学生の学問離れが進行している。社会科学と社会学を混同していたり、「社会科学部って一体何をやっているところなの？」という質問がところどころで聞かれたりする現状からは、社会科学部の学生が迷走している状況が垣間見られる。社会科学部の国際性を充実させるためには、まず留学生の人数を増やし、学生が学部内で多様な価値に触れられる環境を提供する必要があるだろう。それと同時に、実質的な国際化のための具体的な施策を講じることが重要である。「5 原因追求：国際性」で述べたように、数だけの国際化は真の国際化ではない。学生が国際性を体現するという本質的な国際化に寄与する施策（コミュニケーション能力の向上、一般学生に対する英語教育、留学生に対する日本語教育、授業カリキュラムの変更、授業内容の英語化など）を講じていかなければ、社会科学部内の留学生、特にCJSP生と、一般学生との間の溝は深まるばかりである。これらの状況の究極的な原因は社会科学部の理念の不十分性だろう。それは学際性においては諸学問をつなぎ

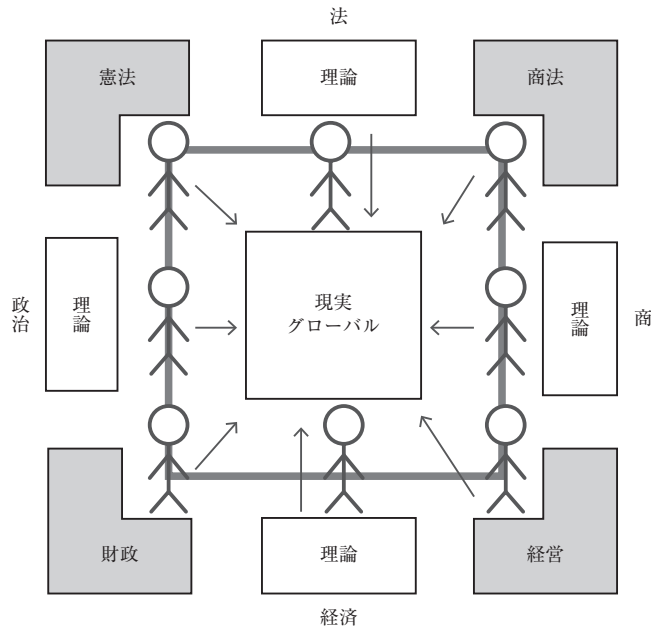


図2 早稲田大学社会科学部の未来 (著者作成)

合わせる力の欠如、国際性においては文化的背景を異にする学生間の人間関係の希薄さに表れている。すると今後社会科学部に必要なのは、諸学問や文化的背景を異にする人々の間の関係を構築する力だろう。この力を「相発性」と呼ぶことにする。

「間の関係を構築する力」、これが相発性である。そしてこれを育むことは社会科学部に相乗効果を生む(図2参照)。学際性と国際性は異なる別個の性質ではなく、相発性という共通性質を持つ。したがって、学際性における相発性を高めることが、直ちに国際性における相発性をも育むことになる。また、その逆も成り立つ。相発性を高めることで、学際性の向上が国際性の向上に波及し、さらにその成果が更なる学際性の向上を生み出すという連鎖が起こるのである。

7 おわりに

最後に若干の補足を加えたい。まず、「5 原因追求：国際性」で示した統計データは社会科学部の国際化の現状を正確に描写したものではない。調査範囲はあくまでも早稲田大学全体である。また、コミュニケーションの定義が曖昧である。あいさつ程度の軽い会話も、授業で行われるディスカッションも、同じ「コミュニケーション」に属してしまっている。国際化の状況を正確に把握するためには、より踏み込んだ調査が必要だろう。現在、国際化の状況を満足に示す統計データは、社会科学部に存在しない。このため、上の

2つの統計（表1、表2）から、社会科学部の国際化はなされていないと我々が結論付けたとしても、それは確たる根拠を持たない推測にとどまる。我々がここに述べたことを基礎付けるためにも、社会科学部が国際化の現状を知るためにも、より詳細な調査を実施する必要があるだろう。

引用文献

- [1] 早稲田大学学生部『学生生活調査』http://www.waseda.jp/student/research/2015/chosa2015_5s.pdf（アクセス 2017/1/7）